『八重葎』物語覚書:中世物語における「狭衣物語」受容の問題と「八重葎」の位置

辛島,正雄

https://doi.org/10.15017/2332645

出版情報:文學研究. 82, pp.21-47, 1985-03-30. 九州大学文学部

バージョン: 権利関係:

「八重葎」物語覚書

中世物語における『狭衣物語』受容の問題と『八重葎』の位置

辛 島 正 雄

はしがき

覧70」(「解釈と鑑賞」昭5・1)が、簡にして要を得た解説となっている。 中世擬古物語 『八重葎』 の内容については、神野藤昭夫・原国人・藤井貞和の三氏によって編まれた「物語文学総

やへむぐら

の変奏的作品。

って舟にのせる。 南北朝頃の成立か。中納言は葎の宿の女(右大臣側室腹の娘)に通いだす。叔母は大弐の息に縁づけようと詐 女は悲嘆から死ぬ。 かたみの品から事情を知った中納言は後悔、菩提を弔う。 飛鳥井姫君譚

いるのである。 をもつ群小物語の中に紛れ込んでしまうことになろう。さほど<飛鳥井姫君譚の変奏的作品>とは、 とのように理解された『八重葎』という作品を物語史に位置づけようとするならば、
 おそらくは、 中世に盛行して 他の相似た相貌

ところが、他方、『八重葎』の全般的な評価としては、

此の物語は、 『八重葎』物語覚書(辛島) 鎌倉室町頃の現存してゐる擬古物語の内では、相当文学的香気の高いユニークな作品といへようと

思ふご

との故堀部(鹿嶋)正二氏の言もあり、今井源衛氏も、

いるのは、珍とすべきである。 の統一性を保つており、とくに性格表現などにおいて、類型に堕し切らず、状況に応じた個性的表現に成功して して、作品としての主体性も個性も持つていない場合が多いのに反して、この作品では、ともかくも作品として 言でいえば源氏や狭衣など古典の切り継ぎにすぎない。しかし、他の擬古物語の多くは、全くの切り継ぎに終始 八重葎もまた「忍音」などの系譜に立つ作品である事はいうまでもない。この作品も、それらの例に漏れず、一

と、そのすぐれた点を指摘しておられるのである。

という作品をよりよく理解し評価するためのひとつのポイントであるように思われる。 **とうして見てくると、△飛鳥井姫君譚の変奏的作品>とされる、その△変奏>のありかたを問うことが、『八重葎』**

の作品としての性格についていささか考えてみたいと思う。 本稿では、右のような観点から、『狭衣物語』との関係や、その影響を蒙った周辺物語との対照を通して、『八重葎』

一 発端部の設定と意図

1

物語『八重葎』の冒頭は、次のごとくである。

うと、こさ大臣どのゝ御つぎのひとつ子になんおはしける。 (③) 人のかたりしは、むかし~~、中なごんの君ときこえて、かたち・心ばへおかしかりしは、其ころの中宮の御せ

この物語が『狭衣物語』の被影響作であり、また、中世の物語の趨勢がいかなるものであるかを考えると、意外な感

文章でもある。が、その点は今は措き、物語が動きだす前の、発端部での設定のありかたに注目してみたい。 じさえする、古めかしい様式の起筆であるが、類型的であるように見えて、その反面どことなく違和感を覚えさせる

内心とはうらはらに、好色な人だから、自由でなくなるのをいやがって、いつまでも結婚しないのだ、などという評 判が立ったりもする。 将来のことを思い、右大臣の中の君との縁組を遺言しておいたのであるが、それが出家のさわりとなることを嫌うか れは、頑としてうけひかない。そうした一方、宮中などでは、女房相手に意外なたわむれをしたりするため、本人の どは、ことのにもまさせ給ひ」(1オ)、将来の嘱望される逸材である。ただかれは、生来なぜか出離の思い強く、 ったひとりの母を残しては出家できないというのが、この世を捨て切れない理由なのであった。父左大臣は、 し、そのことがとくにかれの人生のマイナス材料となることはなく、 かえって、「大やけざまのみち~~しきざえな 主人公「中納言の君」は、物語の通例によって、花実相兼の貴公子であるが、すでに父左大臣を失っている。 息子の しか

以上のようなあらましが告げられたのち、 発端部のしめくくりとして、次のように記される。

はれと見給ふ御しのび所も、をのづからはなどかなからん。 まことのひじりさへ、女のすぢには道をもうしなふなれば、ましてかくてひとひもさぶらひ給はんほどには、 あ

が、前述来の『狭衣物語』における飛鳥井女君の物語であった。 発し、予定どおりに閉じられるのである。そして、こうして示された短篇的構想を 実現するための 骨 格 をなしたの というがごとき雄大な長篇構想は、もとより存しない。主人公中納言は、最後まで中納言なのであり、 ひとときかれの心を捉えたものであるにすぎない。したがって、ここには、ひとりの主人公の全円的な人生を写そう れと見給ふ御しのび所」と主人公とのかかわりの顚末に絞られる。しかもそれは、主人公の人生のひと齣において、 ここにおいて、物語は、今後の展開についての大まかな輪郭を与えられたことになろう。焦点はただひとつ、「あは 短篇として出

しては、『浅茅が露』や『兵部卿物語』が想起される。 始発からはっきりと『狭衣物語』での基本設定を襲いつつ、<飛鳥井姫君譚の変奏的作品>を志向していった物語と してその模倣作を生み出させたのが、この飛鳥井女君の物語であったことも、周知のとおりである。そうした中で、 中世において、『狭衣物語』の影響を蒙った物語は、枚挙にいとまがない。中でも、 絶大な人気を博して、 頻々と

主人公が右大臣の中の君との縁談をいやがるのを承けて、次のようなただしがきを記す。 る。否、それは、登場しないのではなく、そのような人物の存在が、ことさらに否定されているのである。発端部 をそのまま取り込んでいるかたちであるのに対して、『八重葎』では、源氏の宮に相当する人物が 宮との関係が模され、その上に立って、飛鳥井女君の物語の変奏が試みられるわけで、構造的に『狭衣物語』の世界 いま、それらと『八重葎』との顕著な相異を考えてみると、『浅茅が露』『兵部卿物語』においては、狭衣と源氏の 登場しないのであ

ろう。特に、『狭衣物語』巻一、有名な天稚御子降臨の場面での狭衣の帝への返歌、 するならば、これが狭衣の源氏の宮思慕の一件を念頭に置いたものいいであることは、容易に窺知されるところであ 可能に近いであろうが、作品全体を見終った上で、あらためて発端部を執筆していた作者の胸裏にあったものを忖度 右は、『八重葎』を冒頭から順次読み始めたばかりの読者にとっては、そこから何か特別の 意味を抽き 出すことは不 人しれずおぼす事有て、「それならでは」など、おぼすにもあらず。 (2オ)

非ともそう読みたいのである。 この第三句と「それならでは」という辞句とがぴったりと重なり合うものである点(もっとも、裏返しではあるが)、 是

紫の身のしろ衣それならば

少女の袖にまさりこそせめ

(田208代)

しかし、それにしても、何故かくもことさらに狭衣と源氏の宮との関係を否定しなければならなかったのか。

の中核をその話型で形成しようとするものとでは、いささか事情は異なってくるのではあるまいか。 うな人物は登場してこないのである。 では、明らかに物語のクライマックスの構成にあたって飛鳥井女君の物語を下敷きにしながら、源氏の宮にあたるよ に飛鳥井女君の物語だけを借り請け、 ないということ、 的構想の実現のためには飛鳥井女君の物語の骨格を借りれば済むことで、狭衣と源氏の宮の関係まで取り込む必要は まさにそのとおりであるのだが、それならば、 しかし、 邪魔ものの 源氏の宮は切り棄てればよいのである。たとえば、『木幡の時雨』 思うに、物語の構想の一部にそのような話型を借用するものと、 かかる一文を入れてわざわざ断るまでもなく、

不如意を追求してゆく物語でないことが、 作品側のひとつの工夫でもあったわけである。いずれにせよ、源氏の宮のごとき存在を物語で生かすためには、 くにしてしまうことになるのであった。 主人公がその女性を恋慕しつつ、あかぬ思いに心を悩ませていなければ、意味がないのである。そのような主人公の と、一巻限りの小品との差でもあり、また、主人公の憧れの女性を登場させることを有意味たらしめるための、 君との関係とはズレがあるのであるが、それは、四巻にわたって幾人もの女性との 交渉を 描いた 長 篇 ら姿を消してからというもの、本人が再登場しないばかりか、主人公からもほとんど忘れ去られたかのごとくなので 物語』における源氏の宮の存在意義の大きさに比して、格段に影のうすい存在となり下っているのである。中心となり語』における源氏の宮の存在意義の大きさに比して、格段に影のうすい存在となり下っているのである。 ある。このふたりの女人を結びつけるのは、容貌の相似ということで、この点、『狭衣物語』の源氏の 宮と 飛鳥井女 るのは、 先に、『浅茅が露』と『兵部卿物語』には源氏の宮にあたる女性が登場すると述べたのであるが、そこでは、 飛鳥井女君を思わせる可憐な女人と主人公との悲恋であり、主人公の憧れの女性は斎宮として物語の舞台か 冒頭でのそのような女性の存在の意義を持続させえず、やがて贅物のごと 『狭衣物語 『狭衣 常に

ているのだから、 まず源氏の宮を模倣して、それから本題の飛鳥井女君の物語へと展開を図るのに、どこに不審があ かかる批判は、当の物語作者にとっては、寝耳に水であるかもしれない。『狭衣物語』を 粉 本に

"八重葎』 物語覚書

泛ばなかったし、『夜の寝覚』の最初の出逢いのように、どうせ受領の娘というあなどった気持(誤解であったが)で、 切れが悪いのである。しかし考えてみれば、狭衣が飛鳥井女君とはじめて契った時、その心中に源氏の宮の面影など 者が第一に目標とするところの、主人公とはかなげな女人との出逢いでの、主人公の行為の心理的必然性を説明しや ものなのだ、と認識したい。『古とりかへばや』の歌が『今とりかへばや』の始発部に残っているという事実も、 まって、いっこう不思議はないのである。 情欲にまかせて 押し入ることもあるのであり、 主人公の方にゆかしく思う 気持さえあれば、 事は簡単に始まってし に比べると、『八重葎』の場合、主人公が葎の宿の姫君を見そめて忍び入る動機 (8ォ~8ゥ) が、 もいないのかもしれない。読者の興味は完全に新しい恋物語の方に引き寄せられてしまっていようからである。それ すい点である。それさえ済ませてしまえば、その女性は用無しだとて棄ておかれたとしても、さして意に介する読者 いあわせられる。また、もっと積極的に、源氏の宮的女性を登場させることの利点をいうこともできる。それは、作 のありかたは、安易と非難するより、むしろ、ふつうの態度で粉本として仰ぐなら、このようなあらわれかたをする というのは、 物語執筆作法のイロハではないか――。『浅茅が露』や『兵部卿物語』の始発部での はなはだもって歯 『狭衣物語』摂取

って読者の十全な理解は得られずとも、作者にとってみれば、これで重荷を払い、心おきなく自らの目指す作品世界 範をとって源氏の宮的女性を登場させまいとすれば、やはり先の一文は必要だったのである。 ようなタイプのものも多かったであろう。そうした周辺作品の動向を知った上で、それでもなおかつ『狭衣物語』に 響力のもと、いくつも作られていたに違いない<飛鳥井姫君譚の変奏的作品>は、『浅茅が露』や 『兵部卿物語』 飛鳥井女君の物語だけを借りて、あとは知らん顔でよいという理屈は、おそらく通るまい。 このように見てくると、『八重葎』の位相がおのずと浮び上ってくるように思う。短篇たる 自 作の骨格をなすのに 『狭衣物語』の圧倒的影 よしんば一見それをも の

るというのか、はじめから奇を衒うより、類型的なパターンをふみながらも、次第に独自のカラーを打ち出してゆく

÷

当にはぐらかして逃げており(16ゥ~18オ)、結局この結婚は、実現しない。 途中、父の遺言を守らぬかれへの帝の叱責のあったことが、姉の中宮を経由して、母の口から伝えられはするが、 ることもしのびず、主人公のいいなりになっているのである。物語が進行しても、この発端部での状況は変らない。 が逃げているかたちなのである。母親も、息子のいっときも早い結婚を望むのであるが、本人が厭がることを強制す にあるとおり、「さりぬべき御あはひ」(1ゥ)であり、周囲の誰もがその実現を願うにもかかわらず、主人公ひとり 左大臣の遺言によって、主人公は右大臣の中の君との縁組を予定されているわけである。この取り合わせは、本文中 の施してあることに気づく。これもまた、短篇として自作を形成するための安全装置とでもいうべきものである。 先に、発端部のあらましを述べておいたが、そこに主人公の結婚問題のあったことを思い出していただきたい。父 右のような『八重葎』での発端部のありかたを見てくると、ここには、もうひとつ、似たようなしかけ 適

このような設定は、『八重葎』の本筋とは、ほとんど関係のない贅物であろう。 そのようなものを、 なぜ持ち込ん

るか。主人公と女君との出会いとひとときの幸福→主人公の権門の姫君との結婚(→破局)、これはまさしく『しのび ここで、発端部の父の遺言が、作中で実現した(させられた)と仮定しよう。すると、物語の展開のゆくえはどうな

ね物語』そのものである。

でいるのか。

称すべき 一群の 作品が生み 出されることになる。 現存『しのびね物語』は南北朝頃の改作本であるが、原作は平安朝末期の成立と目され、以来へしのびね型>とも 浮舟の系統に立つもので、先の『兵部卿物語』では、飛鳥井女君の物語のほかに△しのびね型>としての俤も この型の物語のヒロインも、『狭衣物語』の 飛鳥井女君に似て、

あり、両者の複合しやすい事情をものがたっている。

作のその方向への展開を未然に防ごうとしたものであろう。主人公の結婚という事態が出来すれば、話が複雑になっ られかねない、そのような懸念から、いちはやく施された工夫であったと思うのである。 ようなパターンへの追従に傾くこと、はなはだしかったのであろう。安全弁を設けなければ、ついその方向にひきず るのである。これは、先の『狭衣物語』に対するのと同様、完全に黙殺してしまうには、 てくること、 おそらく『八重葎』の作者は、これまた当時盛行していたであろう<しのびね型>の物語群を念頭におきつつ、自 いうまでもない。そこで、わざわざかれの縁談をあらかじめ持ち出し、結婚の意志のないことを力説す 周囲の物語の趨勢が、その

4

り出して、純粋培養しようとした物語なのであった。 出発したことがうかがえるのである。『八重葎』とは、じつに当世人気の『狭衣物語』の飛鳥井女君の 物 語だけを取 作品と<しのびね型>の物語との両者の流れを視野に収めながら、より無駄のない結晶度の高い短篇物語を志向 以上のように見てくると、 物語『八重葎』は小品ながら、 中世物語史の主流を占めた、 飛鳥井女君の物語の変奏的 して

になったか。次節では、物語のクライマックス形成の手法から、その一端を探ってみることにしたい。 では、『八重葎』において 純粋培養の試みられた 飛鳥井女君の物語は、いかなる形姿をもって立ちあらわれること

| 『狭衣物語』の受容と変奏

1

が 前節でもふれたごとく、 かかる事実に関して三谷栄一氏は、次のように述べられた。 中世においては、『狭衣物語』の飛鳥井女君の物語が圧倒的な 支持を 得ていたわけである にこの歌のもつ飛鳥井姫君の投身悲劇譚が如何に人気を呼んでゐたかもわかるのである。 (2) 違はあつても、他の歌に比すれば殆ど原本通りといつても過言でなかつたくらゐ、忠実に原歌によつてゐる。そ れだけまたこの歌が如何にこの物語に於て重要視され、当時の人々の口の端に上つてゐたかが想像される。と共 てゐないと思はれる程の相違をもつに拘らず、この「はやき瀬の」 の歌だけは(中略。 諸本本文列記) 皆多少の相 まつたものであるが、その所収の和歌の殆ど全部は、原の狭衣物語の歌を改作したといふよりは、全く拠所にし よ」のもつ悲哀美だらうと考へる。御伽草子となつた「狭衣」の草子は狭衣と飛鳥井姫君とだけの物語にしてし 悲劇性は確に巻一の終りで身を投じようとして残した「はやき瀬の底のもくづとなりにきと扇の風に吹きも伝へ は言ふまでもないが、そればかりでなく飛鳥井姫自身のもつ悲劇性の魅力によるものも多分にあると思ふ。その (上略)飛鳥井姫君があれ程異本を生ずるくらゐ、人気を獲得したのは浮舟的人気の庇 護に よるものであること

右の三谷氏の言説を裏付けるかのごとく、『八重葎』においても、「はやき瀬の」の歌が二度にわたって、ヒロイン

の独詠歌に影を落している事実を見出だす。

・津のくにのなにはのあしをふく風の そよかゝりきと君につたへよ

(37 ウ~38 (42 38 オ)

• 思ひきやかきあつめたることのはを そこのみくづとなしてみんとは

ただ、注意しておかねばならないのは、右の二首の歌のいずれもが、『狭衣物語』における「はやき瀬の」の歌のど かかる事実は、『八重葎』が飛鳥井女君の物語を骨子として 形成されている以上、 当然予想される現象であるが、

とく、作品構成上の重大な位置を占めるまでには至っていないということである。その点、同じく飛鳥井女君入水自

殺の構想を取り込んだ『木幡の時雨』が、ヒロインの

七夕のあふせはよそになしはてゝ そこのもくづとなるぞかなしき(2)

という独詠歌に「はやき瀬の」の歌の面影を写し、物語のクライマックスを飾らせているのとは、大きな径庭を認め

おはならない。 で

ば、 それでは、『八重葎』には、『狭衣物語』における「はやき瀬の」の歌に相当するような歌は存在しないのかといえ そうではない。『八重葎』では、大方の意表を衝くかのように、次のようなヒロイン最後の歌を 用 意したのであ

こひしともいはれざりけり 山ぶきの花いろごろも身をしさらねば

(43 オ) る。

念のため、この前後の物語の展開を確かめておこう。

知り、 後、人間を狙って民部大輔が言い寄って来る。 「思ひきや」の歌 いなく、そのまま二日後に息をひきとる。 色の衣>なのであった。感にたえず、姫君は、わが思いをその衣に書きつける。「こひしとも」の歌である。 に恋しい中納言のものを見つけ、涙に昏れる。しかし、悲しみがつのるばかりなので、細かく引き裂き海に棄てる。 大宰大弐の筑紫下向の舟に騙されて乗せられた姫君は、自分が大弐の息民部大輔と娶せられようとしていることを 絶望して食を断つ。日に日に衰弱し、いよいよ死の予感を深める姫君は、文反故の仕末をしようと思うが、中 (前掲) を詠みつつ顔に袖を押しあてると、それは、この新年の料にと中納言が贈ってくれた八山吹 激しい衝撃を受けた姫君はたちまちにして人事不省に陥り、介抱のか その直

寺に奉納され、たまたまそこを訪れた主人公中納言によって発見されることになる。前節において筆者は、『八重葎』 こそ投げなかったものの、断食自殺という方途により、心痛と衰弱の果て、たちまちにその生を終えてしまったので たが、「こひしとも」の歌は、それの書かれた山吹色の衣が亡き姫君の菩提供養のための 幡とかたちを 変えてみつの た兄の律師によって救われ、狭衣の子を出産し、なおしばらく生き永らえたのであったが、『八重葎』の姫君は、 『狭衣物語』巻一巻末で、まさに投身自殺を遂げるかと思わせた飛鳥井女君は、意外にも、 飛鳥井女君の詠んだ「はやき瀬の」の歌は、後に狭衣がその歌の書かれた扇を取り返したことでその目に触れ 偶然そこを通りかかっ

開に様変えしていることが知られるのであり、その劇的効果を齎しているのが、『狭衣物語』の扇にとって代わる八山 が短篇物語として、周到な用意をもって出発していることを縷説しておいたが、ここでも、短篇らしいあざやかな展

9

吹色の衣〉なのであった。

ところで、このような重要な位置を占める「こひしとも」の歌であるが、その歌意につき今井氏は 恋しいとも言えないことだ、山吹の花色の衣が身体を離れないから。この歌意明らかでない。後考を待つ。

とされ、明解が出ていない。いま、私見を示せば、次のようになる。

「とひしとも」の歌は、今井氏も御指摘のとおり、『古今和歌集』巻十九・雑躰・誹諧歌(一〇一二番)に収められ

た素性法師の

山吹の花色衣ぬしやたれ とへどこたへず くちなしにして

と、当然の理屈である。したがって、この歌は、中納言からの贈り物である山吹色の衣をちょうど身にまとっていた のであるが、下三句「山ぶきの花いろごろも身をしさらねば」は、素性詠において「山 吹 の 花 色」=「くちなし」 し」(口無し)と言わんとしたものであろう。 わが身が「くちなし」(口無し)であれば、「こひしともいはれ」ないこ を本歌とするものである。「こひしとも」の歌では、素性詠の「山吹の花色衣」の初二句をそのまま 借り 用いている (梔子色・口無し)とあることを承けて、「くちなし」(梔子色)の衣が 「身をしさら」ぬ、つまり、「身」=「くちな 素性詠の<山吹の花の色→梔子色→口無し>という発想法を借りて詠出されたもので、試みに訳せば、次

ッテ、山吹ノ花色衣ハックチナシ、(梔子色)デ、ソレヲ身ニツケテイル私モックチナシ、 『八重葎』物語覚書(辛島) (口無シ)ナノダモノ。」 のようにでもなろうか。

「(あなたが) 恋しい」とも言えなかったこと……。

山吹の花の色の衣が(私の)身から離れないものだから。「ダ

な姫君が、いよいよ死を眼前にして、愛する中納言への切ない思いを、精いっぱい托そうとしたものであることが、

理解されるように思う。

結局、今井氏の解に「

あるが、後に中納言がこの歌を見いだした時も、下の句だけであって、 ちなみに、この歌にこめられた姫君の悲痛な思いは、「こひしともいはれざりけり」の 初二句に 集約されるわけで

此うたのもと(上ノ句)のゆかしければ、又これにやと、ほとけの御ひだりのかたに有をもたづね給へど、 ねず

のような細かい点にまで注意を払って構成していることは、創作手法上刮目に値いしよう。 なっているわけである。上の句を知りたいという中納言の希望は、侍従の尼との対面でようやくかなえられるが、こい。 ということになる。つまり、姫君自身の発したことばや文字としては、ついに一度も「こひし」と伝ええない運命と みのくいけるあとのみ有て、もじはみえず。

それは、<山吹>をきわめて印象的に採り上げたものとしては、何といっても、かの『狭衣物語』冒頭の艶麗な場面 が想い起こされるからである(ただし、衣ではなく花の方であるが)。周知の場面であるが、まず概略を辿っておく。 けだが、かかる小道具の変更ということは、『八重葎』作者によって独自にその趣向が 案 出されたと考えてよいので あろうか。その点、筆者には、『八重葎』における創意として手離しで承認することに、 いささかの 抵抗感がある。 以上のごとく、飛鳥井女君の物語での扇にとって代わるべく用意された『八重葎』での山吹色の衣であるわ

が、それを一枝ずつ折らせて源氏の宮の御前に参る。源氏の宮は、前に置かれた二つの花から、「取り分き」 て山吹 を手にする。その美しさに、狭衣は、思わず抱き寄せたくなる気持を抑えながら、 春も残り少ない三月二十日余りの頃、狭衣は、今をさかりと咲きほこる庭の藤と八重山吹とをあかずながめていた

(狭衣ガ)「くちなしにしも咲きそめけん契りこそくちをしけれ。心の中いかに苦しかるらむ」と宣へば、 中納言

の君、「さるは、言の葉は多く侍るものを」と言ふ。

いかにせん。言はぬ色なる花なれば、心の中を知る人で無き

と思ひ続けられ給へど、げに人も知らざりけり。

田26

山吹であることは、おのずから分明であろう。 ないが、結果的には、源氏の宮が山吹を選び取るという一点によって、この場面においてより重大な意義を荷うのが 面理解のキイ・ポイントがあることも、従来説かれるとおりであろう。そのような論議に、いま立ち入ることはでき つとに諸家に論があるが、場面をあざやかに彩るのは、藤と山吹との対照であり、それぞれの花の象徴性の把握に場 狭衣の、恋する相手を眼前にしての独詠歌という異様な構図へ収束してゆくこの場面の意図するところについては、

狭衣の心中ひそかに詠じられた「いかにせん」の歌は、かれの源氏の宮への恋のありようを、みごとに先取り・

源氏の宮が<山吹>を取る→山吹の色は<くちなし>→口無し

型化させて見せているわけであるが、歌の契機となったのは、

「くちなしにしも」云々の引歌として素性詠を挙げる)。一方、『八重葎』の場合は、前述のように、素性詠の発想に則って、 という連想の糸であり、ここから「言はぬ(=くちなし)色なる花なれば」の措辞が導かれることになる(『下紐』では、

山吹色の衣→くちなし色→口無し

確かである。加えて、右に示したような連想のしかたというものは、素性詠に代表されるように、和歌の世界ではつ 両者の直接の交渉を説くには、場面性にあまりに懸隔がありすぎるようで、にわかには認めがたい思いのすることも ないことを趣旨とした歌へと展開してゆくという点において、たしかに両者は軌を一にする。しかし、これをもって という連想から、「こひしとも」の歌を記しとどめる段となるわけである。 眼前の山吹色からおのが思いを告げられ

『八重葎』物語覚書(辛島)

とに定型化していることも考慮せねばなるまい。いま、『私家集大成 中古Ⅰ』(昭48、明治書院) から任意に抜き出し

てみる。

・いはぬまをつゝみしほどにくちなしのいろにやみえし 山ぶきの花、

(斎宮女御Ⅱ 二番)

(元輔Ⅲ

六四番)

・こゝのへにあらでやへさくやまぶきの ものもいはでながめぞおくる。山×きのいろにこゝろぞうつろへぬらし

(実方I 一三番)

おともせでたにがくれなるやまぶきは たゞくちなしのいろにざりける いはぬ色をばしる人もなし

(重之 一一九番)

思ふ>恋の心を触発する色ともいうべく機能しているらしいのに、素性詠以下では、そのような恋歌の趣が認められ ところが、このように列挙してみて気になるのは、『狭衣物語』にしろ『八重葎』にしろ、 山吹がいわば<言はで

ないことで、たんに<梔子=口無し>の語呂合わせに興味が 集中しているらしい点である。 そういえば、『古今和歌

和歌表現史的な状況をよく伝えるものとして、『枕草子』「殿などのおはしまさで後」の段の次の条が上げられる。 の歌題で二十一首が列ねられるが、<口無し=言はで思ふ>のごとき発想の歌は見あたらないのである。こうした、 六帖』第五には、「いはでおもふ」の歌題のもと六首が並ぶが、山吹と関連のある歌はなく、同第六には、「山ぶき」 「人づての仰せ書きにはあらぬなめり」と、胸つぶれて、疾く開けたれば、紙にはものも書かせたまはず、敦

冬の花びら、ただ一重を包ませたまへり。それに、

いはで思ふぞ

と書かせたまへる、いみじう日来の絶え間歎かれつる、みな慰めて嬉しきに、云々

ても「いはで思ふぞ」(「こころにはしたゆく水のわきかへりいはで思ふぞいふにまされる」。「古今和歌六帖」 第五・いはでおもふ 定子が清少納言に対して心にかけていることを伝えるためには、山吹の花びらを贈るだけでは不十分であり、どうし 二六四八番)と記す必要があったのである。山吹の花びらを贈るという行為は、くだんの素性詠「を踏まえて、花び

らに書かれた引歌を暗示する」までであって、<口無し>であることを伝えうるにすぎない。(2)

との期の物語に目を転ずると、『うつほ物語』「菊の宴」巻には、兼雅があて宮に山吹の花にそえて歌を贈っている

のであるが、次のごとくである。

きてえ給ふ、

右大将ぬし、長谷より御嶽詣でと思ほし立ちて出で給ふに、井手のわたりにありける山吹面白きを折りて、

「思ふこと祈りて行けば 諸共にゐてとぞ告ぐる 山吹の花

もろこしもとかいふなれば頼もしくてなむ」ときこえ給へり。御かへりなし。

「井手」が山吹の名所であることから「率て」との掛詞をしくんだものであり、<言はで思ふ>恋の風情など、

山吹の心象が<言はで思ふ>恋と相結んでいるように見えるのは、『源氏物語』である。「真木柱」巻に次のように

ある。

の籬に、わざとなう咲きかかりたるにほひ、いとおもしろし。「色に衣を」などのたまひて、 てゐたまへりし(玉鬘ノ)御さまのみ思し出でらるれば、春の御前をうち棄てて、こなたに渡りて御覧ず。 三月になりて、六条殿の御前の藤・山吹のおもしろき夕映えを見たまふにつけても、(源氏ハ)まづ見るかひあり

顔に見えつつ」などのたまふも、聞く人なし。 「思はずに井手のなか道へだつとも いはでぞ恋ふる 山吹の花

持は、山吹の意味作用による帰結というより、直接には、 てしまった玉鬘のことが、切なく思い出される源氏であるわけだが、注意してみると、かれの「いはでぞ恋ふる」気 玉鬘が山吹のイメージによせて造型されていることは、周知のところであろう。眼前の山吹に、今は髭黒の手に落ち

『八重葎』物語覚書(辛島)

『古今和歌六帖』第五・くちなし・三五〇八番)

ぞ恋ふる」は、行き場のないかれの恋思を象徴することになる。したがって、ここでもなお、山吹と<言はで思ふ> 恋とは、ストレートには結びつきえていないとせざるをえない。 恋ふる」気持を導くわけであるが、結局山吹は「へだつ」と結びつき、ことばの連鎖の中から取り残された「いはで る」のは、山吹とのへだてが決定的であるからである。山吹は<くちなし>を引き出し、<くちなし>は「いはでぞ なったが、山吹が<くちなし>だからかれも「いはでぞ恋ふる」ことになるわけではない。 かれが 「いはでぞ 恋 ふ の方と直接関係を認むべきであろう。山吹は、たしかにその色から、源氏をして「色に衣を」と口ずさませることに という引歌からの延長線上での措辞であるように見うけられる。山吹じしんの意味作用としては、むしろ「へだつ」

限り、『狭衣物語』以前には見いだしえない。『枕草子』『源氏物語』の例は、 恋心の表象となることも、例がある。しかし、<山吹→くちなし→言はで思ふ>とまで伸びる発想法は、管見に入る とを予告するようなかたちなのであった。 もとより、<山吹>と<くちなし>との修辞的な連繫は、つとに定型化していた。<くちなし>が<言はで思ふ> かかる発想法の ほどなくあらわれるこ

.

ようである。

らぬ『狭衣物語』開巻第一の場面であったことになる。そしてそのことは、後続物語の側からも遡行的に裏付けうる 以上から推察するに、<山吹>を<言はで思ふ>恋の心を触発・煽動する花(色)として形象化したのは、 ほかな

影響の顕著な作品であるが、巻二に次のような一節がある。 『いはでしのぶ物語』 は 巻頭描写から『狭衣物語』の冒頭場面の花を持っての訪問という趣向を模すほど、

その

かと、みるにくるしきまでおぼえ給に、云々 むらさきあまたにかほりあひたる御ぞども、山ぶきの御こうちぎをたてまつりたるも、いはぬ色なるわがめから と、そゞろにうらやましく、事ごとなくおぼしつゞけられて、めかれなくうちぞまぼられさせ給。 (右大将ハ)との花(内大臣カラ贈ラレター条院ノ桜)のにほひなどには(一品ノ宮モ) えしもしのばぬあ は (一品ノ宮ガ) れ もや

目の前の一品の宮の着ている山吹色の小袿によって、右大将のかれへの<言はで思ふ>恋の心がゆさぶられる構図で

ある。小木喬氏は、「山ぶきの」以下について

無し」というべきわが身、といっているのである。(2) けことばにする。ここの文は、この素性の歌を下にし、「いはぬ色なる」は、「いはでしのぶ」の意、いわば「口 (『古今和歌集』ノ素性詠「山吹の」ノ歌引用)山吹色は、梔 (くちなし)の実の染料で染める。そこで「口無し」とか

と説明される。「いはぬ色なる」は、あるいは前記『狭衣物語』の「いかにせん言はぬ色なる花なれば」の歌をふむか。 『あきぎり物語』下巻にも

きをとりてまいらせ給ふとて あかくなるに、まぎらはしたまへるようゐなどは、又たぐひあらじと見ゆ。ついゐたまひて、御まゑなるやまぶ、 (殿ノ大納言ガ)つくぐ〜まぼり給へば、(対ノ姫君ハ)いまぞきとうち見おとせたまひて、あさましくて御かほも

といひもやらず、御なみだのほろくくとこぼれたまふに、云々 ぐちなしにふかくそめつるこいごろも おもへどいはですぐる身としれ

語』冒頭場面の趣向と、同じ巻で狭衣が源氏の宮を捉えて恋情を訴える場面(出23ペ)との合成であるだろう。 とあって、山吹の花とともに、 わが <言はで思ふ> 恋の心を訴えているのである。この場面はおそらく、

『風葉和歌集』に、その名もずばり『山吹』なる物語が見え、春下に作中歌が一首収められている。 『八重葎』物語覚書(辛島)

やまぶきのさかりなるところにたちどまりて侍けるに、うちわたりにて見侍ける女のもとなりければ、

2

いはねどもやへの山ぶき九重に、をりしほどより思ひそめてき

この散佚物語に関して、小木氏は、

「ほんとうの恋」でないとする根拠にはなるまい。この歌の二首前に置かれているのは、 前引「真木柱」 巻の源氏の が、互いの素姓をあかし相手の気持を確かめ合う間もなく、何かの事情により女は宮中から姿をくらます。その失踪 とあるのも、「居り」に「折り」を掛けて、<山吹を折る=女に関係を結ぶ>の意を含めてありそうである。 ところ は、この男女が宮中でひそかに深い関係を生じていた事実をものがたるのではあるまいか。歌に「をりしほどより」 うな実情の中で、なおかつ勅撰集に倣った部立を採っているのである。思うに、詞書の「うちわたりにて見侍ける」 歌なのである。もともと物語の中に純然たる四季歌を求めることじたいが 困難というべく、『風葉和歌集』はそのよ いた場面というより、もっと物語のクライマックスに近い場面のようにも思われる。春の部に入っているからとて、 あるという点とからすると、小木氏の説かれるような、とっさに気の利いた歌を詠んで贈るというみやびな行為を描 と解説を施された。しかし、『山吹』なる物語の題号と、『風葉和歌集』撰収歌がほかならぬ「山ぶき」を詠むもので ふたりのその後については知るべくもないが、題号『山吹』物語からこれを<言はで思ふ>恋を主軸とする物語と規 を見いだしたのである――『風葉和歌集』所載歌は、このような状況で 詠まれたものではあるまいか。 を知った三位中将は深い嘆きに沈んだに違いない。ところが、偶然立ち寄った山吹の花咲く家に、恋しいその女の姿 みやび」であろう。この歌は、「古今集」巻十九、素性法師、「山吹の花色衣(中略)」を踏まえたものであろう。 ある。春下にはいっているのだから、ほんとうの恋というよりも、むしろ「伊勢物語」初段にいう「いちはやき 山吹の美しく咲いている家が、もと宮中で見知っていた女の家であることを知って、詠み入れた歌、というので 再会を遂げた

やまぶきの三位中将

所はかかっていたのではなかろうか。ともあれ、歌には、 たしかに<山吹 → 言はで思ふ> のパターンがふまれてい 伝えるいとまもなく行くえ知れずにしてしまった女のことを思う男の嘆きと、思いがけぬ再会の喜びとに、 定したいと思うのである。要するに、男女の再会譚を骨子とした短篇物語ではなかったかと推定され、おのが思いを 『風葉和歌集』撰入歌とその詞書によって物語のクライマックスを再構するなら、右のような物語の展開 一篇の見 を想

看取しようとすることも、あながち筋ちがいとも言えなくなるのではあるまいか。 着し、自由に使えるような契機をつくったのは、やはり『狭衣物語』の冒頭場面の影響力の強さによるものではない かと思われる。だとすれば、場面性の違いを超えて、『八重葎』の山吹色の衣をめぐる趣向に、『狭衣物語』の投影を このように見てくると、確言はできないけれど、山吹が<言はで思ふ>恋のシンボルとして物語作者たちの間に定

結ばれ、首尾がちょうど映発しあうような構成となっているわけである。そうした点につき、森下純昭氏は 上のように『狭衣物語』冒頭をあざやかに彩っていたが、巻四大尾においては、女郎花の<くちなし>色で印象的に ここで想起されるのは、『狭衣物語』における</br>

くちなし
○色の配置のことである。山吹の
◇くちなし
●は、叙

5

色が狭衣物語を象徴する色であろう。 狭衣物語の全体的構想を領導する原理的色は藤の紫と山吹(女郎花)のくちなし色であり、 首尾を彩るくちなし

から示唆・触発されたという以上に、<くちなし>色で縁どられた『狭衣物語』という先蹤作品への深い親昵のたま <くちなし>色の一方である<山吹>の色の衣をもって作品の劇的展開の軸に据えているところには、たんに一場面 と述べられた。<くちなし>色とは、『狭衣物語』にあって、かくも特別な用いられかたをしているのである。 はたして『八重葎』の作者が、ここまで『狭衣物語』を構造的に理解しえていたものかは疑わしいが、ほかならぬ

ものがあったように思量される。『八重葎』読了後、読者の眼底に揺曳する山吹色の幡のイメージは、(3) 的な哀調を帯びているが、『狭衣物語』のトーンをもほのかに漂わせているようである。 いかにも中世

るようなことも、しばしば見うけられることであるが、この場合決定的なのは、主想となるべき<言はで思ふ>恋の 出されたと考えることは、認めがたいように思う。たしかに物語の構想を古歌が支えたり、題号そのものが古歌に拠 色合いが、素性詠にはまるで欠如していることである。素性詠は、措辞を提供し、和歌の発想を支えているにすぎな なお、「こひしとも」の歌が素性詠を本歌取しているからとて、山吹色の衣にまつわる構想が素性詠に よって 生み

6

作者の創作手法の妙に感嘆せざるをえない。 このようにして、『八重葎』における山吹色の衣をめぐる趣向の原点を『狭衣物語』に 見るとすると、 あらためて

もそれは、『狭衣物語』においてはその前提となっていた源氏の宮の設定を意識的に排除したところから 出 発させら れていたのである。ところが、右に見てきた山吹色の衣の設定の源泉は、発端部において注意深く排除していたはず かつ巧妙になされた<『狭衣物語』取り>であったことも強調しておく必要があろう。 への依存度の高さをあらためて認識させるに足る事例であるが、一方で、それが安易な凭れかかりではなく、 き出したものの、趣向の面ではかえって深くそこから滋養を得ていたことになる。『八重葎』における『狭衣物語』 の狭衣と源氏の宮との関わりを述べた部分でのものなのである。してみると、作者は、源氏の宮の設定は構想から弾 ここまでも

縷々述べてきたごとく、『八重葎』の

構想の根底に据えられたのは、

飛鳥井女君の物語であった。

てなされるべきであること、いうまでもないが、前掲の今井氏の評で、「古典の切り継ぎ」でしかないといったんは断 とのような方法によって物語が形成されたことの成否の判断は、やはり『八重葎』 全篇の綿密な分析・検討を俟っ

井氏も説かれるごとく、「作品としての統一性を保つており」、「主体性も個性も持つてい」ると見て、 であるだろう。 と考える。 ときの、作品としての統一性や自律性が保持されていれば、切り継ぎだからということでの烙印は解消されるべきだ いのである。 世物語研究に際してしばしば話題にのぼる「古典の切り継ぎ」云々の問題は、作品評価と直結させられるべきでは ぜられたものが、じつはかかる内実を抱えていたのだということは、是非とも押えておきたいと思う。 作品が興味索然たるものでしかないとすれば、それはむしろ描写力の不足や構成力の貧困に起因するもの 極端なことを言えば、切り継ぎは切り継ぎでいっこうにかまわないのであって、切り継いで出来上った 切り継ぎそのものの齎す弊害とばかりは言えないと思う。 ともあれ、『八重葎』に 関していえば、今 おそらく、 しかるべきで 中

三 叙述量と表現性

ある。

『しのびね物語』とでは、さすがに二倍近い開きが出てくるのであるが、『八重葎』に基準を置けば、四作はほぼ同規 『兵部卿物語』の六〇枚よりはやや多めであるが、『しのびね物語』の一一〇枚に比すると少ない。『兵部卿物語』と 模のものと見做して、いちおうは許されよう。 称するにふさわしい分量であると思われる。この枚数は、周辺の物語と比較してみると、『木幡の時雨』の七〇枚、 短篇物語『八重葎』の叙述量を、四〇〇字詰原稿用紙に換算してみると、 約九〇枚となり、たしかに短篇と

れる(たとえば、「はしがき」に引いた「物語文学総覧70」参照)。しかし、後二者についていえば、 筆者は鎌倉期成立説 ふつうには、『八重葎』『しのびね物語』両作は南北朝頃、『木幡の時雨』『兵部卿物語』両作は鎌倉末頃の成立といわ このように並べながら、気になることが一・二ある。一つは、これらの諸作の成立時期に関することである。 むしろ南北朝に下げたい思いが強い。仮りにそれらをも南北朝の成立と考えるならば、四作すべ 今日

『八重葎』物語覚書(辛息

の物語を尻目に、王朝物語風のスタイルを継承・再現しようとしているさまが窺えるのである。 る。これは、『八重葎』がその構想・人物配置等を借りつつ執筆に要した分量と、ほぼ拮抗するもので あると 言って 二〇枚である。しかし、女君が登場するまでしばらくかかり、そこに五〇枚ほどを要するから、 との直接の比較であろう。 ところで、『八重葎』の叙述密度を測るのに、最も手っ取り早く 判り易い方法は、 やはり粉本である『狭衣物語』 いささか意外の感を抱かれるむきもあろうかと思うが、このことによっても、『八重葎』が、 『狭衣物語』巻一は、飛鳥丼女君の入水寸前で筆が止められているのであるが、 実質は七〇枚分とな 筋書化する周囲 総数約

ことには、すでに定評もあるのである。

対話による場面形成と換言してもよい底のものだが、このあたりに『八重葎』作者の作家的技倆のほどがうかがえる

て、ほぼ同時期の制作にかかるものだということになる。そうだとすると、踵を接して成立した物語が、規模の上で

むすべ

物語であったと思う。

以上、はなはだ雑駁な論述に終始してしまったが、こうして見るだけでも、『八重葎』はたしかに注目に値いする

い」との批判も甘受せねばならないが、そこに構築された物語世界を素直に享受するかぎりにおいて、十分玩味にた(S) 姫君譚の変奏的作品>中の白眉と称すとも、さして過褒ともなるまいと思う。 場面を連ねながら、なお冗長にならず、そして短篇らしい劇的なクライマックスを迎える本物語は、数ある<飛鳥井 える質的充実ぶりを見せていることは認められねばならない。先の展開を急ぐでもなく、会話を主体とした見所ある しさはいかんともしがたいし、「将来に何物も生まなかつたという点では 表だつた文学的評価には 耐えるものではな **|形成しえているとはいえよう。もちろん、しょせん短篇にしかすぎないという点において、内在するエネルギーの乏** 葎』はそのような潮流の中にあって、小さいながらも、自覚的に、ふくらみのあるくっきりとした一つの物語世界を れが改作に限らず、中世物語史を覆う流れとも見るべく敷衍しうるものであることを述べておいたのであるが、『八重 「先行する種々の物語を併吞し、しだいに類似の相貌になってゆく」ものであるとした神野藤昭夫氏の言を引き、(33) 筆者は、さきごろ『木幡の時雨』について論じた際、『しのびね物語』の改作について、 その 変貌のありかたを、

読了せしめる」と称賛される『八重葎』の間然するところのないみごとなスタイルも、 の中に拡散・埋没することを避けるところに作品の存立の基盤を置いているのであって、いうなれば、純粋性を庶幾 のごとく、骨格となる飛鳥井女君の物語のパターンに付随しやすい設定を意識的にあらかじめ排除し、 的趨勢の中でいえば、 ただ、最後に言い添えておくとすれば、「読者をして 多岐亡羊を嘆ぜしめる事なく、流暢な文体と相俟つて 一気に むしろ例外的もしくは異端的なものというべきかもしれないことである。『八重葎』は、 それが作られた当時の物語史

『八重葎』物語覚書(辛島)

し、ほとんどその枠内にとどまって、ひたすら趣向の妙・構成の巧緻を目論む作風であることからも知られ、『人生 する一種の高踏的・文芸至上主義的姿勢を貫いた作品なのである。それは、『狭衣物語』の 築き上げた世界から生起

とは……《といったいわゆる文学的命題の追求は、ほとんど関心の外なのであった。

示であると思ふ」と論ぜられたのであるが、その顰みに倣えば、『八重葎』はまさに『狭衣物語』の「作者のミキサ(タア) ーが快調を示した」その部分の達成を引きうけ、みずからもそのおもしろさを凝縮・再生してみせた、『狭衣物語』 石川徹氏は、『狭衣物語』に圧倒的な『源氏物語』の影響のあらわれることを、「これは剽竊ではなくて顕彰乃至誇

(一九八四年十一月稿)

注

顕彰の物語であったのである。

- 1 鹿嶋(堀部)正二「勸語『八重葎』に就いて」(「国語・国文」4巻7号 昭9・7)。
- 2 就いて」(「文学研究」59輯 昭3・3)を補訂したものである。 今井源衛編『やへむぐら(古典文庫一七三冊)』(昭36、古典文庫) 解題49ペ。 なお、この解題は、
- 3 『八重葎』の引用は、注(2)今井著書に拠り、所出丁数・麦裏を示した。校訂は私見によるところがある。
- 4 『兵部卿物語』については、片岡利博「『兵部卿物語』の構造――『狭衣』『小夜衣』との比較を通して――」(「語文」 昭54・4)に詳しい。
- 5 三句「それならば」を四季本・宝玲本が「それならて」に作る。 所出頁を示した。なお、「紫の」の歌の異同を中田剛直編『校本狭衣物語巻一』(昭51、桜楓社) 『狭衣物語』の引用は、松村博司・石川徹校註『狭衣物語上・下(日本古典全書)』(昭40~42、 によって検するに、第 朝日新聞社)
- 6 究編「登場人物について」43~47ペ・加藤茂「『浅茅が露』の散逸部分についての試案」(「青山語文」6号 『浅茅が露』の斎宮が源氏の宮の形骸的模倣であることについては、大槻修著『あさぢが露の研究』(昭铅、 昭51・3)

に言及がある。

(7) 松尾聰氏は、

文章に至つては、勿論古本とは全く異つたものであつたに違あるまいと思ふ。 与へた儀礼的な「原作尊重」のデエスチユアであつたとさへ考へても大過なかるべく、この二首の位置せる前後の地の この「二首」の今本に於ける遺存は、たゞ原本自由改作主義の今本作者が、物語初頭に於て、古とりかへばやに対して

〈同氏著『平安時代物語の研究』〈昭30、東宝書房〉所収「とりかへばや物語」42ペ)

と述べられたが、鈴木弘道氏が、

今とりかへばやの冒頭より「これやさは」の歌と「ふもとより」の歌が見える箇所付近まで― くとも、男女の性を転換するという特異な素材が用いられた古とりかへばやを、同素材を用いつつ、改作して今とりか とりかへばや作者として、古とりかへばやの断片的な詞章を無意識のうちにでも利用してしまいかねないことは、少な へばやなる新たな作品を創作せんとする場合、心理的にもやはり大いにあり得ることではないだろうか。 -物語の初頭 一は、今

(同氏著『とりかへばや物語の研究解題編』〈昭48、笠間書院〉解題289ペ)

8 丼女君の運命を賦与した設定と言うこともできようか。 徴妙なかたちで主人公の行動を規制しているわけではない。見方を変えれば、源氏の宮の形代たる式部卿宮の姫君に飛鳥 もっとも、機能的には『源氏物語』における形代構想を移したものと見た方がよく、『狭衣物語』の源氏の宮のごとく

と述べられたものの方が、真相に近いであろうか。

9 のとおりだが、偶合以上の根深い繋りがありそうに思う。 ね物語』でも、嵯峨・小倉山の麓の紅葉見物の途次、零の音にさそわれて女君を垣間見るのであって、類型的といえばそ 『八重葎』で、主人公が女君と逢う機縁となるのが、小倉山の紅葉見物の帰途の箏の音であったのに対して、『しのび

10 三谷栄一著『物語文学史論』(昭27、有精堂)第三章・二「読者と改作―説話上の改作」257ペ。

îi 鳥井女君の物語の〈構想取り〉の実態の詳細な分析があり、有益である。 『平安後期物語の研究狭な』〈昭59、新典社〉に改題再録)に指摘がある。 久下晴康「中世擬古物語の発想と形成: ――〈物語取り〉の方法から――」(「平安文学研究」66輯 なお、同論文には、 『八重葎』における飛 昭 56 11。 のち同氏

 $\widehat{12}$ 「津のくにの」の歌が、生前の姫君のことを語る侍従の尼によって主人公に伝えられる(65オ)だけである。

『八重葎』物語覚書(辛島) (3) 大槻修編『吉田忠甲南女子大本こわたの時雨』(昭56、和泉書院)46 ウ。

- 14 ――」(「甲南女子大学研究紀要」創立十周年記念号 昭50・11。のち同氏著『王朝の姫君』 注(11)久下論文に指摘がある。また、大槻修「はかなげな女の悲恋の物語――夕顔・浮舟的女性像の系譜をたどって 〈昭59、世界思想社〉に改
- 15 「入水するのは側近の女房だった侍従で、彼女もすぐに助けられ、その後尼になっている」(注〈11〉久下論文)。
- 16 注(2) 今井著書20ペ附注二六五。
- 附注三七二)と注されるのは、物語構成上からも根拠に乏しく、にわかに従いがたい。 語が不審であるが、鼠に食われて見えなくなっていた姫君最後の歌の上の句を、侍従の尼が思い出して語った、と解する ゆとも』となきこがれ給ひしそのよの事も、いとよくおぼえてかたりきこゆ」(65オ)とある傍線部、「くちすさび」の べきであろう。今井氏が、「いぶかしく思つたくちすさびの理由。七八ページ『冬がれの』の歌のことをさすか」(20ペ 「(上略)と、なく~~其ほどの事、いぶかしかりしくちすさびのもと、『かゝりとつげよ』とことづて、『あはとき
- 18 萩谷朴校注『枕草子上(新潮日本古典集成)』(昭52、新潮社)25%。
- 20 原田芳起校注『宇津保物語中巻(角川文庫)』(昭44、角川書店)51ペ。

19

注(18) 萩谷著書35%。頭注五。

- 21 阿部秋生・秋山虔・今井源衛校注・訳『源氏物語三(日本古典文学全集14)』 (昭47、小学館)
- 22 注(10)三谷著書第二章・二「新想の完成―巻頭描写の展開」25~26ペ。
- 23 小木喬著『いはでしのぶ物語本文と研究』(昭52、笠間書院)40~41ペ。
- 24 注(23)小木著書42ペ注(一一)。
- 29ペ。なお、この『あきぎり物話』(二巻) は、従来「野坂本物語」の仮称のもとに知られていた残闕物語の完本である。 福田百合子「『あききり』(柳井・村上家蔵)――飜刻と考察――その二」(「山口女子大学研究報告」9号

中野荘次·藤井隆著『増訂校本風葉和歌集』(昭45、友山文庫)一二一番。

26

- 27 小木喬著『散逸物語の研究平安・鎌倉時代編』 (昭48、笠間書院) 88% 。
- 28 森下純昭「狭衣物語と山吹」(「岐阜大学教養部研究報告」12号 昭5・2)。
- いたうわづらひ給ひければ、ほかにわたしたてまつりけるに、かぎりにおぼしければ、きたのかたの御もとへ山ぶき 『八重葎』の素材源としていささか気になるものに、次のような『道信集』の歌がある。

この歌は、『千載和歌集』巻九・哀傷の部(五四九番)に撰収され、詞書で前者の内容を、左注で後者の内容を記す。 の夢にあらわれて詠んだことになっており、かれをめぐる逸話が、早くに物語化の波にあらわれていたことが知られる。 詳らかにしえないが、『桂宮本叢書 私家集二』(昭26、養徳社)所収の『道信集』丙本の詞書には、道信が死後北の方 ている、という歌意は、「こひしとも」の歌の内容と酷似する。この道信臨終の逸話がいかほど著名のものであったかは いにくいが、山吹の衣を着ていた自分が〈くちなし〉色に染まったせいか、あなたに思うことをも告げぬまま今死を迎え 道信は、正暦五年(九九四)二十三歳の若さで夭折した天才歌人。そのかれの辞世の歌である。〈言はで思ふ〉恋とはい くちなしのいろにやふかくそみにけむのきぬたてまつり給とて おもふことをもいはでやみにし (『私家集大成 中古Ⅰ』道信Ⅰ

- 30 物語史・序説――」(「文学研究」81輯 昭5・2)参照。 拙稿「『兵部卿物語』の成立時期をめぐって」(「文献探究」13号 昭58・12)・「『木幡の時雨』の再検討
- 31 小木喬著『鎌倉時代物語の研究』(昭36、東宝書房)第一篇・一「鎌倉時代物語の概説」23ペ。
- 32 注(1) 堀部論文・注(2) 今井著書解題47~48ペ。
- 33 神野藤昭夫「『しのびね物語』の位相――物語史変貌の一軌跡――」(「国文学研究」65集 昭53・6)。
- 34 (30) 拙稿。
- 35 注(2) 今井著書解題50ペ。
- 36 (1) 堀部論文。
- 37 石川徹著『古代小説史稿』 (昭 33 、 刀江書院)所収「源氏物語の影響を受けた平安後期の文学」43ペ。
- (37) 石川著書43ペ。

(付記) るところが大きい。いまだ十分にその成果を反映させえていないことを遺憾とするが、なお精密な読解を心がけたい。会 2熱心に参加してくれた学生諸君に、心からお礼申し上げる。 本稿をなすにあたっては、昭和五十八年七月より都合三十回、約一年かかって読了した本物語の輪読会での成果によ